

禪の友

Zen no Tomo

2

February 2019

特集
遺教経について





ご本山だより
大本山永平寺
【涅槃団子】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二一

二月十五日は、お釈迦さまがお亡くなりになられたことをお偲びする「涅槃会」です。

そのため永平寺では、お釈迦さまに倣い、一週間の坐禅三昧の生活（撰心）を修行いたします。また、十四日までの夕べのおつとめでは、お釈迦さまが最後に説かれた教え『遺教経』（仏垂般涅槃略説教誡経）をお唱えいたします。

さて、涅槃会といいますが「涅槃団子」です。涅槃会のおつとめの後には、お供えいたしました涅槃団子をご参拝の皆さま方にお配りいたします。

「涅槃団子」とは、お釈迦さまの舍利（ご遺骨）をあらわしているといわれます。その団子の鮮やかな色は、私

たちを含むこの天地自然は、常に移り変わり（無常）、無量の縁によって成っている（無我）というこの世のありようをあらわしているようです。

静かに坐り、両の掌を合わせて、自分を支えてくれている多くの「ご縁」。ひとつひとつ、お一人お一人、その一日一日に想いを廻らしてみますと「私」というものは無量の温もりによって成り立っているのだなあと気づかされます。普段、心に追われて生活をしておりますと「ご縁」はなかなか見えないものです。ですから、涅槃会に心静かに坐り、掌を合わせて、このわが身がお陰さまの塊であることを確かめたいものであります。



永平寺の台所で、涅槃会の為に団子をこしらえているところ。



ご本山だより

大本山總持寺

【節分会追儺式】

せつぶんえついなしき

大本山總持寺 ☎ 〇四五・五八一・六〇二一



寒中の間、修行していた「寒行托鉢」が終了し、二月三日には春の訪れを告げる「節分会追儺式」が大祖堂で盛大に行われます。

節分会追儺式では、御祈祷法要に引き続き年男・年女や有名人たちが堂内を埋め尽くした参拝者へ豆をまきまきします。

はじめに江川禅師さまを大導師に御祈祷法要が修行され、皆さまの無病息災、諸縁吉祥が祈願されます。賑やかなリズムの太鼓に合わせて般若心経が読まれる中、豆の入った枡が次々と運ばれてきて、禅師さまや年男・年女、有名人たちへ手渡されます。

法要が終わると、禅師さまの「福はーうち！」という掛け声を合図に一斉

に豆がまかれ、千畳敷きの堂内は、たちまち二〇〇〇人近い参拝者たちの歓声で熱気に包まれます。

豆まきの後は有名人たちによる福引き抽選会が行われ、節分会の楽しみを更に盛り上げます。そして参拝者の皆さまはそれぞれの福をいただいで帰られます。

十二日から十四日にかけてはお釈迦さまの涅槃（入滅）を追慕する「涅槃会報恩撰心」が行われ、十五日には「釈尊涅槃会」法要が仏殿で行われます。仏殿内は、かつて与謝野晶子さんが詠まれた「胸なりて われ踏みがたし氷より すめる 大雄宝殿の床」の歌の如く、ひとときわ厳肅な雰囲気になります。

選・坊城俊樹

茶の花のミルク色なす母の忌を

岩手県 阿部 瀬子

評 「茶の花」は一般的には白と表されることが多い。この句は亡き母の追憶の句としてあえて「ミルク色」とした。母というものを色に喩えるならば、たしかに他の色は考えられなくなるほどの印象を受けた。

立冬や時計の振子速くなる

大阪府 数藤 茂

評 「立冬」は秋から冬へと移行する節気であるからすぐに日が暮れてしまう感じがする。と言っても実際に流れている時間が速くなるわけではない。ただ感覚的に振子が速くなる感じがしたというところに俳諧味を感じる。

◆ 間延びせし出雲訛やおでん酒 島根県 藤江 堯

◆ 寒の夜のお里沢一旅一座 三重県 西村 廣視

◆ 今もなほ渾名呼び合ふ日向ぼこ 埼玉県 小林 茂之

◆ 湯たんぽに脛を任せて灯り消し 新潟県 森村 ひろ

◆ 炉を開き木影曳きたる畳拭く 東京都 鬼頭 圭子

◆ 釣宿の師走にくぼる潮層 埼玉県 橋本 永子

◆ 小春日や喉を反らせて牧の牛 奈良県 竹村 和成

◆ 蝸螂の枯れてなほ研ぐ麿り鎌 鳥取県 眞山 博充

◆ 孫の手を余して光る丹波栗 京都府 藤原 昭孚

◆ ロシアより画集届きて日向ぼこ 静岡県 堤 千春

選者吟

泣き笑ひして霜の夜のこけしたち 俊樹

作句小見 この句は少し昔の句であるが、たしか宮城県のこけしの里で作ったものと記憶している。たくさんのこけしが並ぶのを見ると、どの顔も少し淋しそうに微笑んでいる。それはみちのくの冬の夜の厳しさから来ていると思った。

選・長澤 ちづ

罪びとのように背高泡立ち草末^す枯^がれたる
野に冬の近づく

山口県 濱田 道子

評 背高泡立ち草はアメリカ原産の帰化植物で空
地に群生し、ススキ等を駆逐すると言われ一
時嫌われたが、昨今では共生も見られるら
しい。そんな植物への同情の心も垣間^{かひ}見^ませな
がら、冬への季節の移りを捉えて味わい深い。

灯さねば海より暗き男鹿漁港雪に埋^うもる
暮しはじまる

秋田県 小田 崑恭葉

評 海も暗いが、漁港はもっと暗いと雪に閉ざさ
れる暮らしの閉塞感を伝えつつ、冬へ向かう
覚悟を秘めた緊張感もみなぎる。雪の白さと
のコントラストが一首を引き締めている。

◆ 北斗星の柄杓借りての新走^{あらはし}り酒豪百人寄せ集め酌む
新潟県 星野 三興

◆ 昇龍と降龍のある鏡絵藏石見瓦に秋の日照れり
島根県 横山 稟吾

◆ 風向きで今朝は聞こえ来勤行の鐘は捨て来し故郷へ誘う
兵庫県 前田 あつ子

◆ 枝を跳ぶ栗鼠の零せる栗拾ふポケットの二つは家路の土産
岩手県 関合 新一

◆ 人間には変身願望あるという蜘蛛のわたしはこのままでいい
福岡県 三吉 誠

◆ 潮風の丘より見渡す沖合に横一線の漁火揺れる
鳥取県 山本 浩一

◆ 呼び捨てにされた気がして振り向けば私見下ろす皇帝ダリア
愛知県 鈴木 洋子

◆ 紅葉の山の斜面を這うように霧は峰へと消えてゆきたり
岩手県 須田 英子

◆ 独り身となつて茄子植え迷惑な茄子おじさんと自称し配る
静岡県 末松 愛正

◆ 嫁ぐ日にと母縫いくれし着物解く一針ごとに温もりのあり
京都府 内田 孝子

選者詠

横滑りにたたまれてゆく波頭いかなる問いも呑み込むごとく
ちづ

作句小見

冬の日本海の荒々しさには及ぶべくもない湘南の海ですが、それでも自然の力強さには浜辺に行くたびに圧倒され、人間の弱さ小ささを思い知らされて帰って来ます。蜘蛛に為り代わり詠う、三吉さんの視点とても興味深く拝見しました。